

◇撃 沈 巡洋艦 英甲巡ロンドン型(九、八五〇)、英甲巡コンウォール型(二〇、〇〇〇)

ツリンコマリ方面【四月九日】

◇撃 沈 航空母艦 英ハーミス(二〇、八五〇) 駆逐艦 英一隻(濠洲首相カーティンの発表によればエンダウ沖海戦において遁走したる英駆逐艦バンバイヤー(二、九一〇)が沈没せる旨公表した)

◇撃 破 巡洋艦 英乙巡リアンダー型(七、二七〇)

右の外インド洋ベンガル灣の洋上において船舶卅五隻を撃沈、廿五隻を大破。

珊瑚海海戦【五月六日―八日】

◇撃 沈 戦艦 米カリフォルニア型(三二、六〇〇) 航空母艦 米サラトガ(三三、〇〇〇)、米ヨークタウン(一九、九〇〇) 巡洋艦 米甲巡ポートランド型(九、八〇〇) 駆逐艦 一隻

◇撃 破 戦艦 米ノース・カロライナ(三五、〇〇〇)、英ウオーズパイ(三〇、六〇〇) 巡洋艦 米甲巡ルイスビル型(七、〇五〇)

デエゴ・スワレス【五月三十一日】

◇撃 破 戦艦 英クキン・エリザベス型(三一、二〇〇) 巡洋艦 英乙巡アレクスサ型(五、二二〇)

シドニー軍港【五月三十一日】

◇撃 沈 軍艦 一隻

ミッドウエー方面【六月五日】

◇撃 沈 航空母艦 米エンタープライズ型(二九、九〇〇)、米ホーネット型(一九、九〇〇) 巡洋艦 米甲巡サンフランシスコ型 一隻 潜水艦 一隻

ソロモン海戦【八月七日―十四日】

◇撃 沈 米甲巡 ウイチャタ型(二〇、〇〇〇) 一隻 米甲巡 アストリア

型(一〇、〇〇〇)五隻(内一隻旗艦 内一隻轟沈) 英甲巡 オーストラ
 リヤ型(九、八七〇)二隻(内一隻轟沈) 英甲巡 艦型未詳 一隻(轟
 沈) 英乙巡 アキリーズ型(七、〇三〇)一隻 米乙巡 オマハ型(七、
 〇五〇)一隻 乙巡 艦型未詳 二隻 驅逐艦 九隻 潜水艦
 三隻 輸送船 一〇隻

◇撃 破 甲 巡 艦型未詳 一隻(大破) 驅逐艦 三隻(大破) 輸送船
 一隻(大破)

◇撃 破 陸 戦闘機 四九機 戦闘彗機 九機

○帝國海軍の開戦以來七月十日迄に撃沈破せる敵潜水艦累計左の如し

撃 破 沈 五十九隻 撃 破 三十八隻 合計九十七隻

敵のゲリラ戦

帝國潜水艦が大膽不敵にも、カナダ沿岸、米本土沿岸に砲火の洗禮を浴びせてゐるが、一方敵潜水艦も、隠密裡に西太平洋方面に現はれてをり、ゲリラ戦を續けてゐる。わが方も不幸數隻の船舶が被害を受けてゐるが、その量は樞軸側が米英の船舶を撃沈しつゝある量に比べれば極めて僅かであり、豫想してゐた被害の量に比較しても遙かに尠いことをはつきりと申上げておく。これについては海軍としても逐次有效適切な對策をとつてゐる。船舶撃沈について例を給油船にとつても、アメリカの如くその三分の一も撃沈されて、西海岸では油が剩り過ぎて、東海岸は油が飢饉であると大騒ぎを演じつゝあるのに比べると、わが國給油船の損害は開戦以來今日まで一、二隻に過ぎないのであつて、この點からいつても、敵潜水艦が活躍してゐると言つても、その被害は桁が違つてゐることを理解さ

れ、また海洋國民たる日本民族は今まで通りどん／＼海洋に漕出さねばならぬと思ふのである。私共が將棋を差しても分るやうに、敵の王様を取るためには金銀或は飛車角さへも犠牲とすることがある。王様さへ取れば勝ちだからである。歩を一つ取られてがっかり落膽してゐては將棋は差せない。

現地を見て特に強く感ずることは、どこへ行つても陸海軍の協同作戰が水も漏らさぬ緊密さをもつてゐることであつて、これが大戦果の大きな要因であることは申すまでもないのである。次に到るところで心強く感じたことは、第一線の將兵が必勝の信念に燃えてゐることである。

もと／＼必勝の信念といふものは、この信念をもつて戦ひに臨み、戦ひに勝つていよいよ確立されるものである。海軍の第一線部隊はこれをその通りやつてゐるのであつて、全海軍將兵は上下を通じ、體驗から得た必勝の信念をしつかりと握つてゐる。ところで必勝の信念は、司令官とか指揮官だけが持つてゐたのでは駄目であつて、下一兵に至るまでこの信念に徹底することが絶対に必要である。上下を通じて必勝の信念に燃えてゐる精銳な

軍隊だけが戦ひに勝つといふことは、古今東西の鐵則である。

軍紀振ひ、攻撃精神旺盛で、しかも實力が卓越したわが軍隊の如きは正に、この精銳な軍隊といふべきであらう。わが海軍は開戦以來數次の大作戦を實施し、將兵は身をもつて必勝の信念を體驗確立する絶好の機會を得た。

一例を申上げると、ジャバ海方面の大殲滅戦においても、敵の有力な聯合艦隊がジャバ海へ頭を出した僅かの間に、これを海底深く叩き込んだのであつて、敵はこれによつて全く優越感を失ひ、わがほうは天祐神助といふか、奇蹟的なことも多かつたのであるが、敵の全部を屠つて、われは一艦も失はないあの人間離れした戦果は、何と言つてもわが海軍の實力を物語るものである。また卓越した戦法が必勝の信念を基礎づけてゐることも見逃してはならない。すなはち、開戦以來何十回にわたり航空部隊があつた戦果を挙げたのも、またわが艦艇がたゞ／＼大輸送團を護衛し、大なる被害もなく陸軍と共に上陸作戰に成功してゐるのも、實にわが戦法が卓越してゐることを示すものである。

わが將兵は戦闘を體驗する毎に、必勝の信念を鞏固にし、戦勝の確信については微塵も

疑問を持つてゐないのである。

また嬉しく思つたことは、陸軍の部隊長や参謀のところに行くと、海軍の功を言つてをり、海軍の部隊長参謀のところへ行くと、陸軍を褒めてゐるといふ有様であり、且つ上官は部下の功を讃へ、部下は上官を絶対に信頼し、渾然一體となつて戦ひ、家族の親しみにじみ出てゐることであつた。

わが軍のかうした姿を眼のあたりに見ても、開戦劈頭マニラ灣にあつたアメリカのアジア艦隊司令官ハートが、同僚である陸軍の苦境を見捨てていづれかへ姿を消し、またシンガポールにあつたイギリス艦隊が、マレー半島に苦戦中の陸軍を顧みずして、逸早く遁走したことを今更のやうに思ひ合せ、勝つ國、負ける國の相違がはつきり見える氣がするのである。

現地の將兵はいづれも元氣旺盛であつて、作戦遂行中の最前線は別として、一應落着いた占領地では、物資も剩り、不自由なく、病氣などについてもあまり心配される必要はないと申上げたい。固より現地の勇士諸君が榮をしてゐるわけではない。ジャングルと闘

ひ、灼熱を冒し、或は怒濤と闘ふなど、なみ／＼ならぬ努力をして戦ひを續けてゐるのである。或る現地で、今度の戦争は様子が違つてゐるので、つい面喰ふことがある。まるで内地で演習をやつてゐるやうな氣がする。一合戦がすんで休んでゐると、原住民が小旗を振りながら周りに集つてあれこれ歡待してくれる。内地の行軍でちよつと休止してゐると、村の人達が心から迎えてくれる。ちやうどあの氣持ちだと言つてゐた。

また各地で會ふ勇士には、物資不自由の折柄、内地で切望されるやうな品物を入れた慰問袋を送つて貰ふが、これは却つて心苦しい、無理をしないやうにお傳へ願ひたい。だが精神的な慰問袋は是非、しかも頻繁に欲しい。かう言つてゐた。現地でも欲しいものを節約しても、またときには作戦の不自由を忍んでも何とか内地に物を送り届けたいといふ温い氣持で、現に少しづつではあるが、客船は勿論、軍艦さへ物を内地へ運んでゐるのである。

このやうに第一線は銃後を考へ、銃後は第一線を思ひ、總力戦の一部をお互ひに分擔し合ふといふところに、今や前線も銃後もないことをつく／＼體驗して、心強く感じた次第

である。

これに反して敵側の状況はどうかと云ふと、前にも述べたやうに、米英の將兵は自己の快適な生活を追ふことに汲々として、精神的に既にわが敵ではなかつたことが、各地の捕虜などによつて明かにされてゐる。

これは或るアメリカ驅逐艦の捕虜の話であるが、

「お前の艦の沈むときの状況はどうであつたか」と質問すると、

「分りません」といふ。

「自分の艦がどうして沈んだか分らないのか」

と更に問ひ質して見ると、

「艦長は第一弾を受けると、すぐ總員退艦を命じたので、われ遅れじと海の中に飛び込んでしまつたので、あとはどうなつたのか分りません」といふ。

これでは戦はずして敗れてゐるのである。

また快適な生活を求めることに汲々とした事實は、敵の陸上陣地の到るところで見受けられることであつて、日本の軍隊が如何にして敵に勝たんと猛攻撃に前進するに引替へ、彼等は自己の生活を保證せんとする結果、防護施設に力を注ぎ、防備兵力の集中に専ら意を用ひてゐたことが見受けられる。

しかし防禦が如何に完全でもそれだけでは戦争には絶対に勝てないのであつて、たゞ負ける時間を引延ばすに過ぎない。殊に面白いことは、彼等は負けることを覺悟し、敗れた場合の對策を數ヶ月前から考へてゐたらしいことである。

その事は前にも纏めて述べてゐるが、例へば焦土戰術を準備し、無線電信の一ぱん大切な發信装置を破壊するとか、油田の採油口にセメントを埋めるとか、動力を供給する源である發電のスイッチに火藥を仕掛け、スイッチ一つで切斷するとかしてゐるのであるが、自分達の住宅だけは破壊せず、また復舊工事に必要なものは放棄せず、隠してゐた事實がある。これは日本軍に對する反撃の成功を期待してゐる。圖太い根性の一つの現はれであり、飽くまで自己本位の生活意識を端的に物語るものと言へやう。彼等は一應焦土戰術の

準備をして、ボタン一つ押せば全設備を破壊し盡せる仕組にしておきながら、飽くまで日本の實力を見縊り、最後の瞬間まで火をつけることを躊躇したわけで、電撃戦に會つて、飲みかけのお茶も残して倉皇として遁走し、無疵のまゝにわが手に歸した重要施設も澤山ある。

防衛に専念した例にこんな話もある。敵は飛行場に穴を開け、日本軍の使用に堪へぬやうにしたのはよいが、やがて味方空軍の使用を不可能にしたことは氣がつかず、また虎の子の戦闘機を、飛行機用の塹壕に入れ、網を被せて蔽ひ隠し、わが軍の銃爆撃を避けようとしたのはよいが、われとわが足を縛り、わが猛撃を受けていざといふときに出撃が間に合はぬやうになり、いはゆる自縛自縛の好見本を示してゐたのであつた。

勝利は、國民の總力

今や戦局の大勢は決定的となり、わが不敗の態勢は逐次その成立に向ひつ、ある。

今次戦争を通じて國民が獲ち得た何よりも偉大なるものは、世界で一ばん強いと言はれた敵に堂々と勝ち得るといふ自信である。勝つ國民は、まづ勝利の自信を持たなければならぬ。それは飽きでも自信であつて、自惚であつてはならない。敵を侮り驕慢に流れるのが危険であるやうに、自惚もまた危険である。

南方の大寶庫にしても、「日本用」と立札が立てられたわけであるが、中に

秘められた寶物はこれから調査され、また整理され、更にこれを運び出さねばならぬものもある。したがつて、日本の輸送力、工業力などの發展の餘地は、まだくゞ残されてゐるのであるが、たゞこゝで心強く思ふのは、米英が考へてゐた「長期戦になれば必ず日本は參る」といふ敵の考へを全然崩壊し去つたことである。わが方は長期戦となつてもよい素地は、既に固まりつゝある。洵に頼もしい限りと申さねばならぬ。

この儼たる事實を前に、日本を長期戦に追込ました米英が、却つてわが封鎖に會つて、彼等こそ長期戦の遂行に悲鳴をあげてゐるのではないかと察せられるのである。

御承知の通り、イギリスは飽までインドをその手中に残し、支配せんとし、アメリカはニュージローランド、濠洲を足場として日本への反撃を企てゝゐる次第で、珊瑚海海戦やソロモン海戦の如きもその一つの現はれに過ぎない。しか

るに彼等の企圖は次々に打碎かれつゝあるのである。

しかしながらこゝで考へねばならぬことは、彼等の心の奥には、彼等の擁する經濟力、工業力をもつてすれば、緒戦における負け戦さは、必ず挽回出来るであらうといふ期待が、なほ根強く働いてゐると思はれることである。

したがつて日本が少しでも弱く見せれば、直ちに強氣に出て來ることを忘れてはならない。しかし戦争は經濟力、工業力だけ優秀でも勝てるものでないことは、防禦を堅固にしても勝戦さにならぬのと同然のことである。

大東亞戦争の全戦局は、今や一轉した。これに加ふるに南方の寶庫開發もいよくその緒につき、長期戦に對してもわが戰略態勢は逐次鐵壁不敗の固さを加へんとし、また前線將兵の士氣いよゝ旺盛であることは喜びに堪へない。

敵は潰滅に瀕した軍備の再建、増強に狂奔する一面、必死のゲリラ戦、宣傳戦、思想戦を執拗に展開することは明かである。

前からも述べた通り、飛行機、潜水艦は制海、制空権の域外にあるものであつて、今後ともゲリラ戰的蠢動は、當然覺悟しなければならぬ。ソロモン海戰等の例に見るやうに、米英は敗戰に對する國民への名譽恢復のため、眞劍に反撃を企圖してゐるのであつて、印度洋にも、南太平洋にも、また北太平洋方面にも相當の部隊をもつてわが隙を狙つてゐるものと見なければならぬ。

常に俟つあるの態勢を整へてゐるわが海軍としては、敵が焦つて出撃して來るのは何よりの好餌であり、一度その姿を發見するや直ちにこれを撃滅してしまふことは、ソロモン海戰がよい例である。しかし乍ら、何分廣大なる海面を擁してゐるので、これが防衛についても並々ならぬ苦心があるのであるが、敵のゲリラ戰的蠢動や、出撃によつて時に多少の被害ありとしても、これによつて、敵の戰力を過大に評價し、敵の思ふ壺に陥込むやうなことがあつては、それこそこれまでの赫々たる大戰果を傷つけ、前線に奮闘する勇士に對しても、

洵に申譯ないこととなるのである。

さらにこゝで呉々も指摘して置きたいことは、世間ではやゝもすれば大東亞戰爭は一段階を劃して、いはゆる建設期に入つたと考へ易いやうであるが、活潑な征戰は現に遂行されつゝあり、將來もなほ施行されるであらうといふことである。

近來喧傳されてゐる南方建設も、或は國內産業の能力増進策等も、今の場合敵の戰力を破摧殲滅し、敵を屈伏せしむるに役立てることが主體であり、これによつて我々は充分なる戰力を養ひ以つて敵撃滅に邁進しなければならぬ。

我が海軍は、東西南北各四千餘裡に亘る大防衛線大作戰線を確保すると共に敵の一艦一艇と雖も撃滅し盡さねば止まぬ不退轉の決意を新にしてゐるのである。



思ひおこせば、日本海海戦の門出に掲げられたZ信號旗は、敵艦隊撃滅の精神に燃立つたものである。三十七年後の今日、承け継がれた同じ精神は、太平洋にインド洋に遺憾なく發揮されてゐるのである。海軍の諸先輩が勝つて驕らず、兜の緒を引締めて、今日見るやうな海軍戦果の下地を作られた努力のあとを偲ぶと共に、大東亞戦争に護國の華と散られた忠靈に對し、深甚なる感謝の誠を捧げねばならない。

帝國海軍の全將兵は、意氣いよ／＼軒昂敵撃滅の精神に燃へてゐるのである。この精神によつて大戦果があげられ、廣大なる海面の制海權が確保されてゐるのであつて、これによつて國民は安じてその職域に奉公できるのである。それにつけても、國民一人一人が、今こそお互の胸のうちに、Z旗を掲げ「われ／＼の力の總和が國家の興廢を決するのだ」といふ信念をいよ／＼鞏固にし、決意を新にして邁進すべき時だと思ふのである。

昭和十七年九月十八日印刷
昭和十七年九月廿五日發行

五〇、〇〇〇部 定價八拾錢

述者 平出英夫
編輯者 大島敬司
印刷所 東京市麹町區内幸町二丁目二ノ四
大日本印刷株式會社櫻町工場
平石恒夫

發行所 東京市麹町區内幸町二丁目二ノ四
會員登錄番號 一〇一四六
興亞日本社
振替東京六七六四一番
電話銀座五二一五番

作戦一萬渾
(出文誌認あ220017)
禁複製
轉載

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

作戦一萬哩



興亞日本社版